宮崎口蹄疫防疫に従事して

岡山県畜産協会　岡田　耕平

１．突然の出張

５月１３日木曜日午後３時、「明日３時半、宮崎空港集合・・・」の電話を受けた。
口蹄疫防疫への応援派遣である。

全国の畜産協会に応援要請があり、私にも派遣についての打診があったので、十分承知していたが急な話だった。

伊丹発１２時４０分の宮崎行を手配してもらい、航空券と旅費は翌日岡山駅で受け取ることになった。

私がするのは、自分自身の身の回りの準備なのだが、さて何を準備すればいいのか。
先に宮崎入りし、帰っている畜産課の職員に電話で聞き、送られてくるファックスを読んだ。

着ていった物は捨てて帰ること。下着等の着替えを多めに準備すること。

捨てて帰れる物と言われると、さて何を着て行くか。見苦しくないもので・・・。

２．現地の状況

宮崎空港へは２時過ぎに着き、県庁でミィーティングを受けた。
現況、注意点、宿の割り振り等。

＜5月13日までの状況＞

- **発生件数：86例　（牛施設51，豚施設35、牛豚共存1）**
- **市町別発生件数　川南町：78，都農町：4，えびの市：4**
- **埋却処分終了：35例（40．7%）**

初発は都農町であるが、発生の９０％以上が川南町であった。また埋却地の選定が遅れ、殺処分して埋却できたのは、発生件数の４０％にすぎなかった。

発生のほとんどを占める川南町は、宮崎市の北東３５ｋｍ、人口１６千人で、農業粗生産額の７０％を畜産が占め、全国屈指の養豚地帯となっている。

宮崎県自体畜産県で、豚で全国第２位、肉用牛で第３位の飼育頭数を誇る。

私への割り振りは、宿舎は宮崎市内のビジネスホテルで、川南町での殺処分班への配属となった。

３．日　程

朝食は５時半からで、朝は非常に早い。宿舎と川南町役場の間の送迎バスは、７時１０分にホテル前を出発、７０分かけて川南町役場に着く、役場では先ず第１回目の着替えをし、下着の上に防疫衣を着る。

＜宮崎県及び川南町の牛豚飼育状況＞　（平成１９年２月１日現在）

畜　種	宮　崎　県		川　南　町	
	戸　数	頭　数	戸　数	頭　数
乳　牛	４３４	１９２００	２７	１３５０
肉　牛	１０３００	２７７８００	２３４	１１０００
豚	６５０	９０１１００	９５	１４１６００

各自１脚のイスの割り当てがあり、着ていった物、履いて行った物などはそこにまとめて置く。そしてミーティング。現場での人の割り振りは、国の人がやっていたが、全国からの動員者を現場に振り分け、効率よく動かすことは大変難しく、新しい現場での初日はロスタイムが多かった。取っかかりが遅くなり、その分終わりが遅くなる。

ミーティングを終えて、バスで現場へ行く。

現場では、着ている防疫衣の上に、更にもう１枚防疫衣を重ねて着る。

専用の長靴を履き、手袋、マスク（？）を付け、防疫衣に所属、名前、獣医師は赤色で「Ｖ」と班を示す番号を記入して畜舎内（汚染区域内）に入る。そして夕方まで殺処分作業。

作業終了後は、汚染区域内で防疫衣着用のまま消毒し、次にパンツ１枚に剥がされて消毒、次いでシャワー（最初の現場には有った）を使い、総てを着替えて（下着類は新品が用意されている）下着の上に新しい防疫衣を着て、バスで役場へ帰る。

役場で宿から着てきた物に着替えるが、現地にシャワーがない場合は、役場の仮設シャワーを使用する。このシャワーは、体育館に宿泊の自衛隊員が使用するため大幅に不足、いつも列が出来ていた。

夕飯は、役場で弁当が支給された。

昼・夕食連続での似通った弁当は、食欲を減退させ、以後の飲酒欲も無くしてくれた。

ホテルに帰るのはほぼ８時過ぎ。シャワーを浴びて、横になるとすぐに寝てしまった。

食い過ぎは無く、晩酌の悪癖も除かれ、早寝早起きで体も十分に動かす毎日だった。

４．現場での作業

現場では殺処分業務に当たった。

①豚の現場

最初の現場は３７例目の発生農場で、５千頭規模のウインドレス豚舎の繁殖養豚場だった。

発生確認は５月７日、殺処分開始が５月１４日で、発生から１週間経過している。

豚は１日に４億個のウィルスをまき散らすと言われているので、とてつもない量のウィルスがここで生産されたことになる。

作業員は退出時に十分な消毒をしていたとしても、豚舎に接して設置された飼料タンクにやって来る飼料運搬の運転手はどうだろう。養豚場毎に衣服、履物を換えて、シャワーを浴びていただろうか？

子豚の鼻鏡に潰瘍が見られ、蹄が破れて出血しているものも多かった。
正に口蹄疫発症患畜の真っ直中にいる。背に警策の一撃を感じた。

繁殖豚は電殺器で、子豚は薬と炭酸ガスでの殺処分を行った。

ガスによる殺処分は、豚房をビニールシートとコンパネで被い、簡易ガス室を作り、そこに子豚を入れて炭酸ガスを吹き込むもので、１頭々に注射を打つ手間は無いが、時間当たり、人数当たりの作業効率は、薬殺の方が良かったようだ。

特に薬殺は、ほてい捕定の人がきちんと子豚を捕まえてくれると、非常に能率が上がった。

しかし、捕定役にまわった人の中には、「子豚がかわいそうで、悲鳴が耳に付いて当分消えそうにない。」と言う人もいて、「牛や豚は、早晩人に殺されて肉になるんですよ。自然死なんか無いんですから・・・」などとい

う理屈は、気持ちのうえで受け入れられない様であった。

②肉牛の現場

２番目の現場は、４７例目の発生農場で、６９０頭飼育の肥育牛舎だった。

５月８日の発生確認、5月１７日の殺処分開始で、９日を経過している。

ここでも多くの発症牛を見た。

牛舎の周囲は一面畑で、牛舎から５０ｍくらい離れた所に埋却用の穴が掘られていた。埋却地がないのが、最大のネックと言われていたが、この場所の選定に９日間を要したのだろうか。

肥育牛では鎮静剤を先ず注射し、その後、薬剤を静脈注射をしたが、注射器を取り替えながらの注射は骨が折れる作業だった。

５．振り返ってみて

今回の口蹄疫防疫作業は、私にとって全く思いもしない経験であった。口蹄疫の患畜を目の当たりにし、発生が止まらない中での大規模防疫活動の一端に加わった。

４０年前、獣医学生として口蹄疫の講義を聴いたときは、国内で発生することは無いだろうし、自分がこの病気に関わることは無いと思ったものだ。

それだけに、平成１２年の発生には今回以上に驚いた。

続く平成１３年のＢＳＥの発生と相俟って、畜産資材が大量に世界中から流入する中で、日本だけが清浄国であり続けることの困難さが思われた。

進入防止の完璧が期しがたいなら、発生後は速やかに鎮火させたいものだ。

今回一緒に働いた人は、国や各県の人が主だった。

「初発はともかく２例目以降は人が運んだと言わざるを得ない。」とか「４月５日には異常牛に気付きながら、４月２０日まで陽性判定が出なかったがなぜか。」

「防疫に強いはずの、ウィンドレス豚舎が早い時期にやられている。飼料タンクは、豚舎を囲むフェンスの外側になきゃあダメだ。」などの指摘もあった。

一方、発症患畜のいる畜舎のすぐ脇の道を、一般車両が走っていた。発生後の時間の経過で交通遮断が出来なくなっているのだろうか、道のノリに、当初に使ったと思われる「交通遮断の札」が落ちていた。

「一般車両の消毒をすべきだ。」の声も高かったが、消毒マットを敷いて、全車両の消毒が始まったのは、５月１６日からだった。

世界に誇る日本の家畜防疫体制のはずなのに、診断が遅れ、殺処分が遅れ、後手後手にまわった今回の宮崎口蹄疫防疫は、今この国の一番弱い部分をあぶり出しているのかもしれない。